

都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌
【フィールド・ノート】 no. 79 Dec. 2013

FIELD NOTE

no. 79 Dec.

— 特 集 —
生きものに近づく
ための工夫

朝日曾^{あさひそし}雌にある大平の集
落にやつてきた。

蛇行する道に沿って民家
が点在し、谷底から山に
向かって田畑が拓かれて
いる。

夕刻が近づき、どこから
か煙が立ちのぼり始めた。
風呂焚きだろうか、暖を
取るのだろうか。

煙は、山の木々から洩れく
る陽射しを浴びて、時折あ
たかな色を反射させた。

—— 2013年11月20日



FIELD・NOTE

〔フィールド・ノート〕

No. 79 Dec. 2013



06

— 特集 —

生きものに近づく

ための工夫

04 FIELD・MAP

08 フィールド・ミュージアムのたのしみ

第22回

身近な野生動物の世界に近づくには
身の周りの生きものへの関心

〔コラム〕

ちょっと気になる
都留市の生きもの事情

14 野外へ誘う一冊

16 生きものとの関わり方

18 森歩きの野帳から

—生きものとの付き合い方を考える—

20 フィールド暦

22 私たちのフィールド・ガイド

24 出逢う喜びを求めて

—ナイトハイクを通して知ったこと—

26 秋の声を聞く

28 センサーカメラが写した動物たち

30 特集を終えて

32 「つくる」をみつめる —第5篇—

感謝のプレゼント

34 自分の決めた道へ進む

37 地域で働く 地域と生きる

40 起き上がる朝 第9回

—学びの場での向き合いかた—

42 富士道を歩く 2013 ③

44 FIELD・NOTE NEWS



表紙の写真 (2013. 12. 03)

「モグラ塚あらわる」

本学4号館前の芝生にモグラ塚があらわれました。地上からモグラの姿は見えませんが、土のなかで力強く活動していることがわかります。(加藤萌香=写真)

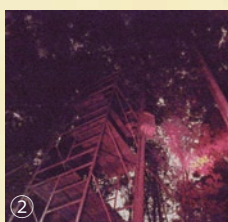
『フィールド・ノート』では、「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に、ソローの妹、ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。



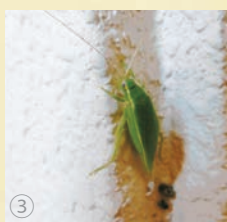
FIELD MAP

今号の取材先

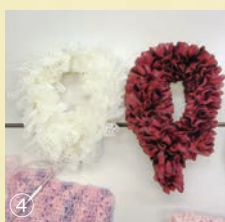
- 1 ギャラリー写真撮影場所
大平川上流
- 2 「出逢う喜びを求めて」
都留文科大学うら山
- 3 「秋の声を聞く」
都留文科大学周辺
- 4 「感謝のプレゼント」
金勝さんのお宅
- 5 「自分の決めた道へ進む」
ギャラリー喫茶「ビアンカ」
- 6 「地域で働く 地域で生きる」
就労支援センター「いちごいちえ」



② ムササビの巣箱



③ アオマツムシ



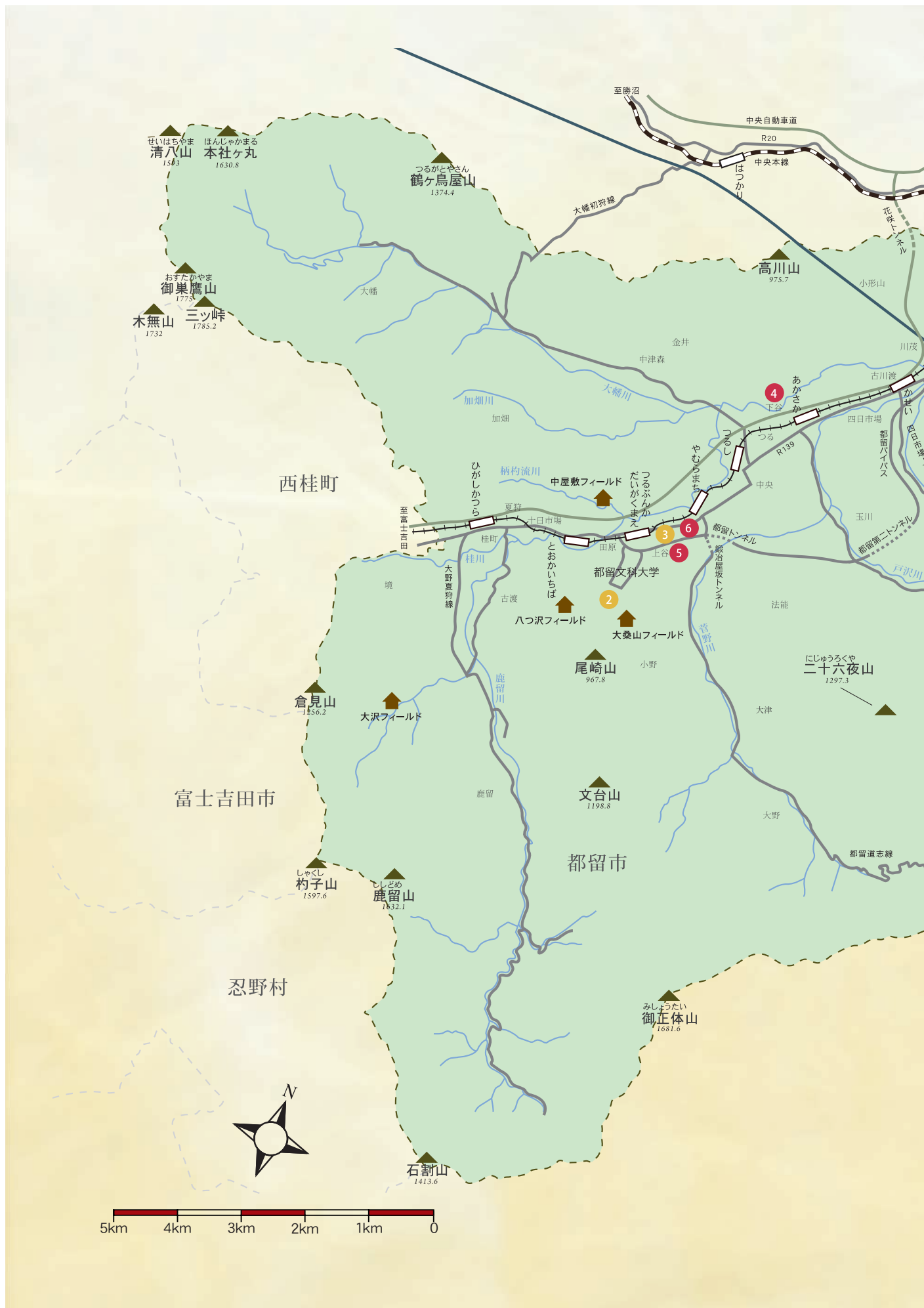
④ 金勝さんの作品



⑤ ビアンカの外観



⑥ いちごいちえの外観





イノシシ 2009年11月12日 中屋敷フィールド
センサーカメラにて撮影。イノシシは現在もたび
びこの道を通っているようすがカメラに写ります

— 特 集 —

生きものに近づく ための工夫

私たちの身のまわりには、
たくさん生きものが
住む場所や食べもの、
行動する時間帯を選びながら
それぞれにあつた暮らし方をしています。

彼らに近づく工夫を考えることは
ほんものの姿から学ぶ機会を
豊かにするとともに、
生きものとのほどよい距離を知り
上手なつき合い方を
見つけることにも繋がるでしょう。

『フィールド・ノート』79号は
活きいきとした生きものに近づくための
「ひと工夫」を特集します。



フィールド・ミュージアムのたのしみ

H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。



身近な野生動物の世界に 近づくには



私たちが暮らすまちのそばでも、さまざまな野生動物に出会うことができる

ムササビやリスなど身近な野生哺乳類は、子どもたちばかりでなく大人にも大きな関心を引き起こすようです。ムササビの観察会を開催すると、数秒ほどの短い滑空にも大きな歓声があがります。

しかし一般に、野生哺乳類は警戒心が強いので、遭遇する以外に出会う機会ほとんどありません。そこで、まずは食痕や糞、足跡など生活の痕跡を手がかりに彼らの世界に接近していくことになります。

こうした生活の痕跡には、動物についての大切な情報が残されています。たとえば、どんな動物も効果的に食物を食べる技をもっています。食事は、もつとも無防備になりや

すく、捕食者に襲われやすい瞬間です。なるべく効果的に食べること、そしてもつとも安心できる空間で食事をするのが大切になります。

つまり食痕には、その動物の洗練された食事の技だけでなく、どのような場所が安心できるのかといった情報が残されているのです。それが読み取れば、どこでその動物に出会えるか見当がついてきます。

私たちのフィールド・ミュージアムでは、ふだんは出会うことが難しい動物たちに親しみ、相手の暮らしになるべく干渉しないで出合いを楽しむにはどうしたらよいかを、ムササビやニホンリス、野ネズミ類、モグラなど都留の身近な哺乳類の生態をもとに工夫してきました。

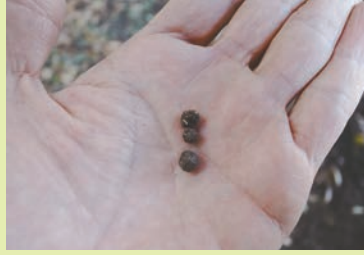
私たちの身近にいるコウモリは空中、ムササビやリスは樹上、野ネズミ類は地上、モグラは地中、というように、世界の哺乳類が進出した空間をほぼ網羅しながら暮らしていることになります。

身近なこうした哺乳類との出会いは、世界の哺乳類の基本的な行動や生態を理解することにもつながるのです。

ムササビ



①ムササビは、まず森に接した神社を探してみる



②糞は球状をしている。これがあつたらムササビが生息している証拠



③日没後、30分を目安に、赤いライトでじっと観察してみよう

ニホンリス



①ニホンリスは、クルミを二つに割って食べるのが特徴



②クルミが実る秋、ニホンリスは枝を伝って食べに来る



③横木を渡して餌台をつくってみる。昼間もニホンリスが観察できる

ムササビ

ムササビは、日没後、30分ほどで活動を始めます。生息する場所さえ確認できれば、年間を通して観察ができます。

ムササビは、スギやヒノキなどの植林地にも生息しています。まずは森に接する神社などを探すとよいでしょう。ムササビはふだん、木の洞を住み処としています。神社の木々は御神木として大切に守られてきた大木が多く、こうした洞ができればよいのです。

神社では、まず糞を探してみましょう。神社の大木の下を探してみても、直径が5mmほどのほぼ球形をした糞が見つかったら、それがムササビの糞です。

糞が見つかったらよい観察です。夜行性ですから懐中電灯を使いにくくなりますが、滑空のさいに明るいライトで照らすのはムササビにとって非常に危険です。まぶしさのあまり滑空に失敗することもあります。そこでムササビが光をまぶしく感じないように赤いセロファンを懐中電灯に取り付けるといいでしょう。木の葉が落ちる冬ならシルエットでも姿を観察できます。こうした工夫は夜行性のほかの動物の観察にも応用できます。

ニホンリス

夜行性の哺乳類が多いなか、ニホンリスは昼間に活動するという特徴をもっています。樹上に巣をつくることが多いのですが、地面に降りて移動することもあります。

リスがいることを知る手がかりとして分かりやすいのは、クルミの食痕でしょう。固いクルミの実を二つに割って食べます。

図鑑には、リスが食事をした痕として、マツボックリの食痕を「エビフライ」と称して紹介してありますが、ムササビも似たような食べ方をするため、ほとんど見分けはつきません。リスが食べたものかどうかを判断するには、じつさいに観察して確かめるのが一番です。

リスは、木の枝の付け根など、周囲が見渡せるような開けた場所で食事をする傾向があります。枝から枝へと移動するため、リスを観察するには、倒木などを利用して地上2mほどの位置に横木を渡し、開けた場所に餌台を設置するとよいでしょう。

リスは早朝と夕方の活動が活発になるといわれています。5mほどの距離を保ち、じつと観察してみましょう。

アカネズミ



①アカネズミの毛色は、赤みがかった褐色をしている



②アカネズミがクルミの実を食べた痕。中央に丸い穴を開けるのが特徴



③水槽を使った観察装置。お互いの暮らしに干渉しないで観察できる

ヒミズ



①ヒミズは世界でも最小クラスのモグラ類。鼻が長いのが特徴の一つ



②ヒミズは倒木の下などにトンネルをつくる



③倒木の代わりにガラスを置いてみる。生きたヒミズに出会える

アカネズミ

森を歩いていると、斜面などに直径3cmほどの穴が開いているのを見かけます。この穴は、モグラ類が開けたものかもしれません。こうした穴をアカネズミは移動や食事場として利用することがあります。

アカネズミはクルミが大好物です。森を歩いているとクルミに丸い穴をあけた食痕が見つかることがあります。これがアカネズミの食痕です。石の隙間などを探してみるとこうした食痕が多数見つかることもあります。狭い空間がアカネズミにとって安心できるということでしょう。

そこで小さな水槽などを利用して狭い空間を再現してみましょう。なかに好物のクルミやヒマワリの種を置いておくと、アカネズミがやってくるでしょう。ガラス一枚隔てただけで安心して食事をするようですが観察できるようにになります。

この装置を使うことで、相手の暮らしに干渉することなく観察できます。私たちのフィールド・ミュージアムではこの装置を「出会いの箱（エンカウンタースペース）」と呼ぶことにしました。

ヒミズ

モグラは地中で、自分の住み場所やトイレ、通路などすべての空間をつくり出す哺乳類です。日本では世界でも珍しくモグラの種類の多い国です。なかでもヒミズは、世界でも最小クラスのモグラです。

ヒミズは、昼間でも活動しています。森のなかの倒木をそつと持ち上げてみると、たいいていトンネルを見つかることができます。直径が3cmほどのトンネルが見つかったらそれがヒミズのトンネルです。モグラの仲間には、トンネルの壁や倒木など、固いものに体が触れていると安心するようです。

そこで、倒木の代わりにガラスを置いてみます。ガラスの下にはヒマワリの種を置いてみましょう。ヒミズがいれば、数日してガラスの下にトンネルができるようになります。毎日、ほぼ同じ時間にヒマワリの種を置いておくと、やがて青みがかった毛色のヒミズが観察できるようでしょう。

ガラス一枚隔てただけで、トンネルのなかを素早く移動するヒミズと出会うようになります。

北垣憲仁（本誌発行人） 文・写真

ちょっと **気** になる

都留市の生きものの事情

スズメやツバメの数が減り、ニホンジカが増えているといわれる昨今、都留市の生きものの事情も様変わりをしています。近年、市内で見られている「ちょっと気になる」生きものを紹介します。

西教生（本誌編集部）＝文
本学フィールド・ミュージアム＝写真



2013年6月に都留市鹿留で確認されました。モリアオガエルは5～7月に樹上に産卵をするカエル類です。市内では産卵の記録はないように思います。



イソヒヨドリは海岸に多い鳥です。大月市では10年ほど前からまれに見られていましたが、都留市では2005年1月に初めて確認されました。その後は、2013年5月にも観察されています。

外来種



南方系のチョウで、関東やその周辺では人為的に持ち込まれた外来種です。2013年7月には都留市宝で幼虫が見つかっています（本誌78号42ページを参照）。



私が都留市でアオマツムシの声に気づいたのは2010年9月です。その後、2013年まで毎年確認されています。2013年はこれまでよりも多くの個体が鳴いていました。



市内数箇所アレチウリが定着しています。花が咲いた後には、トゲのある実をつけます（左上）。本種は特定外来生物に指定されています。



2011年6月に都留市十日市場で撮影されました。尾にある黒い模様が特徴です。特定外来生物です。

1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月

アオマツムシの鳴き声が聞かれる時期

＜特定外来生物とは？＞

外来生物法で飼養や栽培、生きたままの保管や輸送などが禁止されている生きもののこと。

身の周りの 生きものへの関心

生きものに近づくために、
どんなことをすればいいでしょうか？
身の周りの出来事を見ていき、
まずは彼らがそこにいることに気づくのが大切です。



ダンコウバイの花



ツバメ

私はふだんの生活のなかで、身近に見られる生きものと積極的に関わることを楽しみにしています。どんな生きものに出会えるのか、季節を追って紹介していきましょう。

霜柱がなくなり、ソメイヨシノの花が咲くころ、都留市ではツバメが見られるようになります。東南アジアで冬を過ごした彼らは、繁殖のために日本にやって来ます。私にとってツバメは、春を告げる生きもののひとつです。そんな時期に大学の裏山を歩くと、フデリンドウやダンコウバイなどの花が咲いています。セイヨウタンポポの花が目立つようになるのもこのころです。

4月に入ると、センダイムシクイやヤブサメ、キビタキなどの夏鳥が渡来します。二十四節気のひとつである「立夏」（5月6日ころ）には、アブラチャンやケヤキの下にオトシブミ類の揺籃ようらんが落ちています。人知れず成虫で越冬していたオトシブミ類は葉に産卵して、その葉を巻いて揺籃を作ります。注意深く探すと、揺籃を作っている成虫を見つけることができるかもしれません。また、夜に水田地帯を通るとアマガエルの合唱が聞こ

えてくるでしょう。

関東が梅雨入りするあたりにホトトギスの声が空に響くようになります。昼も夜も近くで鳴いているのに、なかなか姿を見せません。林縁では白くなつたマタタビの葉が目を見せます。

8月中旬には、コナラやミズナラのドンガラが枝ごと地上に落ちていることがあります。強い風が吹いたわけでもないのに、葉が数枚ついた枝がいくつも落ちています。枝には何かで切られたような跡があり、ドンガラは帽子のところに小さな穴が空いていたら、それはハイイロチョッキリの仕業です。この時期にはセンニンソウやボタンヅル、クサギなどの白い花が咲き始めます。



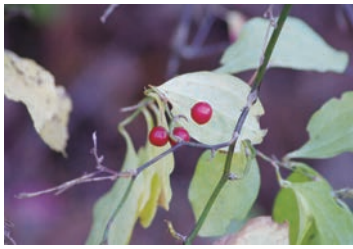
ルイスアシナガオトシブミの揺籃

スズメやカラス類が集団でねぐらをとるようになると秋の始まりです。木の葉の色づく季節はすぐそこまで来ています。こんな時期に、ヤクシソウをはじめとしたキク科の植物やリンドウは花を咲かせます。本学の自然科学棟にナミテントウが集まり、越冬に入ります。落ち葉を踏んで歩く道、スイカズラやサルトリイバラ、イボタノキなどの実を目で追いつながら、アオジやツグミなどの冬鳥を探すのもいいでしょう。

雪が降ると、大学の裏山の遊歩道にはノウサギやテンなどの足跡が残されています。いつもは目にするものがない哺乳類の存在を強く意識するのは、冬ならではの出来事です。ウソがソメイヨシノの芽を食べているところを観察できるかもしれません。オオイヌノフ



ウソ



サルトリイバラの実

グリやホトケノザ、ウメの花が咲き、季節は春へと移り変わっていきます。

私がこれまで紹介してきたことの多くは、大学から半径500mの範囲内で見られるものです。しかも、特殊な道具を使わずとも観察することができます。遠くに出掛けなくても、同じ場所を繰り返し歩き、観察を重ねる。用意された出会いに甘んじることなく、まずは1年間、これが続けてみてください。いろんな季節のいろんな時間帯に、雨の日にも出掛けることをお勧めします。生きものの関心の度合いは、その時々によって違っていることでしょう。生きものとの出会いを楽しむには、彼らがそこにいることに気づかないといけません。

それぞれの生きものには固有の時間が流れていて、生活史があります。彼らの暮らしを垣間見たとき、さらに深くその営みに触れたいくなります。オトシブミ類は毎年決まった時期に揺籃を作り、ツバメやホトトギスはそれぞれだいたい同じころ日本にやって来ます。身の周りの生きものに関心を持つこと。それはやがて、さまざまな生きものに出会い、親しむことに繋がっていきます。また、身近な



ノウサギの足跡

生きものに親しむとは、生きもの同士の繋がりを見ることがあります。たとえば、ウソはソメイヨシノの芽を食べますが、少なくとも大学の周辺ではソメイヨシノの花が咲かない年はありません。

生きものに目を向けると、季節の移ろいを察知できます。日々の暮らしのなかに、ぜひ、そんな楽しみを取り入れてみてください。

西教生（本学非常勤講師） 文・写真

『わたしの山小屋日記 夏』

今泉吉晴著 論創社 2012 年

今 泉吉晴先生がじっさいに山小屋で過ごした日々を綴ったエッセイ。先生の生活はあまりにも魅力的で、羨ましくなりました。自らの経験から学び、身につけた自然との関わりかたは生きものたちにとても優しいものです。こんなにも野生の生きものと仲良くなれるんだ！と驚きました。先生が出会った生きものはイタチやコウモリ、カヤネズミ……と盛りだくさん。とくに2匹のムササビとの生活のなかで動物の欲求を理解し、応えていく姿に憧れます。先生がいつも大事にしていたのは生きものたちの気持ちを考えること。

読み終わったとき、思わず私も山小屋を建てようかと真剣に悩みました。写真を多く使ったエッセイなので、生きものに癒されながら、とても楽しく読めます。(加藤萌香)



野外へ誘う一冊

『ヤマネって知ってる? ヤマネおもしろ観察記』

湊秋作著 築地書館 2000 年

国 指定の天然記念物で、準絶滅危惧種でもあるヤマネ。多くの人が名前は聞いたことがあっても、あまり知らないヤマネの生態や魅力が紹介されています。著者はヤマネミュージアムの館長を勤めていらっしゃる湊秋作さん。彼がおこなったヤマネ観察やそれを通して得た発見など、長年のヤマネ研究の記録が書かれています。文中に書かれた湊さん自身のエピソードからも、彼のヤマネへの情熱がうかがえました。

また、本書にはヤマネの写真がたくさん載っています。そのヤマネたちの可愛いこと！まるっとしたフワフワの体に、大きな黒い目。うろから顔を出しているヤマネの写真をみると、思わず口元が緩みます。ヤマネのことが好きになる一冊です。(舟田早帆)

『東京を騒がせた動物たち』

林丈二著 大和書房 2004 年

「^{なんじ}汝が耳に人語が解らば我が言うところをよく聞くべし」——かつて、キツネに向かってそんなふうに懇ろに話しかけていた時代があったことを、130 年ほど前の新聞が伝えています。著者の林丈二さんは 20 年以上国立国会図書館にかよって明治時代の新聞を読み、気になる記事や挿絵などの情報を丹念に収集し続けました。本書は、その膨大なデータのなかから動物（全 29 項目）の記事についてまとめた「中間発表」。クスッと笑えるエピソードから、現代ではありえないゾッとするような出来事まで、記事は多岐にわたります。

明治の東京を舞台に繰り上げられる、人と動物の喜怒哀楽の日常には、生きものたちと背中合わせで暮らしていくうえでのヒントがそこかしこに隠れています。(牛丸景太)

『Birds Note 野生の不思議を追いかけて』

山岸哲著 信濃毎日新聞社 2012 年

千葉県にある山階鳥類研究所の所長をされた山岸さんの著書。これまでに新聞や機関誌などに書かれた文章が、「よみがえれ野生のいのち」「したたかな野生のいのち」「野生のいのちいつまでも」という3つのテーマにまとめられています。

山岸さんは著名な鳥類学者ですので、鳥類に関する内容がほとんどです。興味深い生態や行動、保全の考えかたなどがわかりやすい言葉で紹介されており、生きものを調査するときの姿勢や、教育に対する氏の持論も展開されています。112 ページにある、「若い研究者が安易な適応論法による論文の量産に追われ、それこそ余裕を失い、研究の中でのよい意味での遊びの効用を忘れかけているような気がしてならないのだが。」という一文が心に残りました。（西教生）

『高崎山のサル』

伊谷純一郎著 講談社 2010 年

日本の霊長類学の扉を開いた名著とされる本です。自らの目と野帳と鉛筆だけを頼りにニホンザルの生態の謎を追いつけたこの記録からは、フィールドワークの基本や考えかたが読み取れます。著者は、調査地に入るとまず、フィールド全体を把握することに力を注ぎ、ひたすら山と森を歩き地形の全容を理解しようとします。そして地域の人からニホンザルの生態について聞き取りを重ねながら対象の動物の生態に迫ります。

高度な機械を用いて生きものの謎を解くことも大切ですが、「人間が生まれながらにもっている優れた感覚や、野外観察者の全体を把握しようとする努力」こそが重要という姿勢は、生きものの世界に近づくさいの私の大切な支えになっています。私も未だに自分の体と野帳と鉛筆という原始的な手法でフィールドを駆け回っています。

（北垣憲仁）



『頭骨コレクション 骨が語る動物の暮らし』

福田史夫著 築地書館 2010 年

頭骨から動物の暮らしを探っていく一冊です。殺さない、壊さない、荒らさないをモットーに動物の骨を収集している福田さん。なかでもこの本では頭骨を中心に、動物の生態を読み解いています。野菜についた歯型から下顎骨の歯並びを見て、それがどの動物の歯型なのかを判断したり、ドブネズミ（都会のネズミ）とハタネズミ（田舎のネズミ）の頭骨の違いを比較したりした話などが収録されています。

頭骨をじっくりと観察することで種族による生活環境の違いがわかることに驚きました。死んでしまってもなお、動物たちは私たちに暮らしぶりを教えてくれます。この本はなかなか本物の頭骨を見ることがなかった私にとって、動物の生態について考えるよい機会にもなりました。

（前澤志依）



生きもののとの関わり方

小口尚良（都留文科大学附属小学校教諭） 文・写真

都留市内で小学校の教員をされている小口尚良さんに、日々実践している「工夫」を教えてくださいました（編集部）。

最高の教科書は自然

先日、6年生の理科の授業のなかで、「地球カレンダー（地球誕生を1月1日、今を12月31日が終わる瞬間として、46億年をとらえるもの）」を学習しました。そのなかで、自然界が超加速度的に変化しているのが今だということを話題にしました。その変化を強力に進めているのが人類で、その一員である私たちには、学ばなければならないことがたくさんあると思います。そして、その多くを教えてくださいるのが長い年月と多くの生命によってつくられてきた、「今、目の前にある自然」だと思います。

最近では、「これが欲しい」というとき、かなりのものが24時間手に入ります。でも、自然は違います。リスに会いたくて山に行っても、ふつうは会えません。どこにいるのか、1日を、1年をどう過ごしているのか、上手に近づくにはどうしたらいいのか、このようなことをひとつずつきとめ、クリアしていく必要があります。チャレンジした人にはわかると思いますが、そのためには何年もかかります。でも、その過程のなかで、さまざまな学びや発見や感激があります（もちろん失敗や後悔、懺悔の念も）。

具体例をひとつあげます。私は、野生のモグラの観察撮影をしたいと思っていますが、残念ながら、まだ実現はしていませんが、野外から金網のトンネルに入ってきたモグラの撮影には何年か前に成功しました。

アズマモグラ

もっとも身近な野生哺乳類のひとつ。地下のトンネル生活にみごとに適応した身体や動きなど、おもしろいことがたくさん。本ページ右上の写真は、金網のトンネルを進むようす



身のまわりで 探してみよう！



ホンドリス (ニホンリス)
胸に手をあてて、何を考えているの
でしょう。よく見られるポーズです



ヒゲナガオトシブミ (♀)
アブラチャンの葉っぱを食べるメス。
葉っぱにあるたくさんの食べあとの
秘密がひとつ解けました



カワラナデシコ
きれいなピンク色で独特の形をした
花弁が印象的。生育できる環境が
減ってきています

その映像は、飼育下のものより迫力があり、見た人に、モグラの新たな一面を間違いなく伝えていていると思います。しかし、チャレンジを続けていけば、もつと違う何かを伝えることができる、そう思っています。

偶然の出会いは限りなくある

相手を限定しなければ、生きものが生活する姿など、素晴らしい場面に出会うことがたくさんあります。その時、それに気づくことができるかと、ちよつとだけ時間と手間をかけられるかで、ずいぶん変わってきます。

今は、カメラもビデオも飛躍的に使いやすくなり、記録・整理して伝える手段が格段に向上しています。本物との出会いとは違いますが、人と自然をつなぐ手立てとしては有効だと思えます。

子どもの力を借りる

本来、大人よりも子どものほうが、自然と近い距離にいて、生きものたちとの出会いも多いと思います。今の私の大きな情報源は子どもたちです。一番伝えたい相手であり、一番伝えてくれるのが子どもです。地域の生の

情報の価値を見落とさず、しっかりと取り上げていくことが、地域の自然のようすを知っていく上ではとても大切です。子どもたちも、自分が出会った生きものが、どんな生きものなのか知れたがっています。

クイズ形式で自然を紹介

今年度、子どもたちが持ってきた生きものや情報をもとに、クイズ形式で学校のまわりの自然を紹介しています。自分たちの見つけた生きものにおもしろい秘密があること、そしてそれがみんなに紹介されることが子どもたちの興味関心を高めているようです。

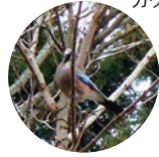
問題をだす自分も、いろいろと調べることで、よつて多くのことを新たに発見します。自然の具体物には、学ぶことがたくさん詰まっています。



クイズコーナー
毎日多くの子どもたちが挑戦しています。できるだけ身近なものを、実物で紹介するようにしています



ニホンリス



カケス

森歩きの野帳から

—生きものの付き合い方を考える—

私にとって森歩きとは、散歩のひとつです。思うままに歩き、ときには道を逸れたり、足早に歩き抜けたりすることもあります。同じ場所で散歩を続けていくうち、次第に私の散歩はその場所に親しみをもつことに繋がっていききました。

西丸堯宏（本学卒業生） 文・写真

変化する自然の機微

もう5年近くになるでしょうか。私は赤外線式の自動撮影カメラを用いて、都留文科大のうら山に暮らす動物たちの変化を追いつながら、さまざまな生きものとの出会いをたのしんでいます。

私がうら山にかようルート沿いには、コナラを中心とした雑木林が3箇所ほどあります。2013年10月28日、その林床いっぱいコナラのドングリ（堅果）が覆いつくして

いました。足を踏み出すたびに、堅い殻が割れるパリッという音が鳴ります。これほどまでにドングリが豊作なのは、私が歩き始めてからはじめての出来事です。先週、先々週と台風の続いた影響があつて、たくさんさんのドングリが落ちたのだと思います。

落下したドングリはいったいどんな動物たちが利用するのでしょうか。糞に殻が混じっているのを見かけるイノシシやアナグマ、タヌキ。今年は彼らがドングリを食べる姿を観察する、よい機会かもしれません。野ネズミ

やカケスが彼らのとおつておきの場所にドングリを運ぶ姿を、こっそり覗き見することもできるかもしれません。ドングリが豊作だと、ツキノワグマのクマ糞（※）の数はどう変化するのかも見もののひとつです。

私は「ドングリが豊作だ」ということ、そこからたくさんさんの生きものの姿を思い浮かべることができたことにうれしさを感じました。それは今までの出会いや経験のなかから、山の変化を感じ取り、その一部

コナラのドングリ（堅果）





ツタウルシの紅葉

始終を想像することができたからです。ドン
グリを始めとした木の実の豊凶のほかにも、
渡り鳥の渡来日や個体数、山に暮らす動物の
変化など。同じ場所に足を運びつづけること
で、経験から経年の変化を読み取ることがで
きるようになってきます。

歩きながら考える 生きものとの出会い方

2009年9月のうら山。私ははじめてリ
スと出会いました。日が傾き暗くなり始めた
スギ・ヒノキ林を歩いていると、リスが2頭、
追いかけてつこをしているところに遭遇しまし
た。枝をつたい木々のあいだを軽妙に駆け回
り、時折ジャンプして隣の幹に飛び移ります。
ほんの数秒の遭遇でしたが、私はその姿に魅
了されたことを思い出します。そのとき「もつ
と姿を見たい」と感じたのは、私にとって自
然なことでした。

手がかりは、たった一度の出会いのみ。そ
のときの私が考えうる出会い方といえ、ま
ったく同じ条件でそこにかようことしかあ
りませんでした。

H・D・ソローはその昔、キツネに会おう

と午後のあいだずっと草原に寝転んだり（こ
のときは結局会えなかった）、ウシガエルを
観察しようと朝から夜遅くまで池の前に立ち
尽くしたりしていたといえます（H・D・ソロー
著、山口晃訳『ソロー博物誌』彩流社、2011年より）。

私は同じ条件、つまり夕方にスギ・ヒノキ
の林にかようことで、数週間越しにリスとの
邂逅を果たすことができました。飛び立つカ
ケスの羽音やシルエットを、なんどリスと勘
違いしたかわかりません。しかし些細な音や
残像に反応するほど、感覚を研ぎ澄ませて、
生きもののことを待った経験はこのときがは
じめてでした。

この出会いをきっかけに、うら山のほかの
場所で彼らに会うにはどうしたらよいかと考
えるようになりました。まずは食痕をさがし
たり、巣をさがしたり。そうしていると自然
に、新しい食痕の多いところ、つまりリスが
頻繁に来ているであろう場所がみえてしまし
た。あとはそこへかようのみです。すると、
ほどなくリスとの出会いをたのしめるようにな
りました。足を運び、小さな事実を積みかさ
ねていくことで、おのずとリスとの約束の
場所が見えてきたのです。

出会いをかさねた先に

生きものたちとの出会いのほとんどが限ら
れた一瞬であるように、山や森全体の変化も
緩やかで、一目では捉えることができません。
どちらも気長に接点をもちつづけ、機が熟す
のを待つことが大切です。だから私は、小さ
な出会いや経験をノート（野帳）に書き留め
ています。それは私にとって生きものを知る
ための種子なのです。条件さえ整えば、いつ
でも芽吹くことができるよう、野帳のなかで
来るべき日を待っているのです。

生きものに近づくと、どれだけの経験を
かさね、彼らの暮らしのさまざまな場面を想
像できるかというところにあるのではないで
しょうか。ただ、どれだけの出会いをかさね
ても、私たちが「知らない」ことばかりです。
そんな自然の懐の深さ。それが出会いをつ
ねに新鮮なものとしてくれていると同時に、
私がうら山という場所にかよい続ける源泉と
なっているのだと思います。

（※）ツキノワグマは樹上で木の実を食べるさい、枝を折
りながら木の実をかき集める。折った枝をどんどんお尻
に敷いていくため、一見、鳥の巣のような痕跡ができる。
これを「クマ棚」「クマの座布団」などと呼ぶ。ぜひ観察
してみたいシーンのひとつ。



カケスの羽

秋はいつにも増して鮮やかな色があふれ、目を
楽しませてくれます。そんな時期に都留市内で
出会った生きものを紹介します。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真

フィールド 暦



ツリフネソウの花

2013年10月12日 都留市夏狩
湿った場所を好み、いろいろな虫が
集まります。熟すとちょっとした刺
激で種子をはじき飛ばします。



ホシホウジャク (?)

2013年10月25日 都留市上谷
この写真からはよく似ているクロ
ホウジャクと識別できませんが、撮
影時期や好む植物の分布などから、
ホシホウジャクと思われます。

オオスカシバ

2013年10月25日 都留市田原
体は黄緑色で、腹面は白色です。翅
は透明ですが、羽化直後は鱗粉で覆
われています。



ホトトギスの花

2013年10月15日 都留市田原
食草で、ルリタテハなどのチョウが
食べます。学内では白と紫の花が見
られます。



ガマズミの実

2013年10月15日 都留市田原
白い花が咲き、晩秋赤く熟した実は
生で食べることもできます。



テングタケ

2013年10月15日 都留市田原
毒があるため食べてはいけません。
毒を利用してハエの捕殺に使われる
こともあったそうです。

ビオトープの池周辺で見られるトンボ



クロスジギンヤンマ

(2012.6.25)
ギンヤンマと違い、胸の側
面に黒い筋が見られます



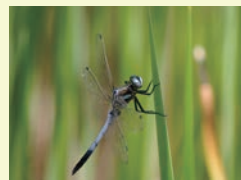
ミヤマアカネ

(2013.8.13)
翅に褐色の帯があるのが
特徴です



オオアイトトンボ

(2013.8.13)
一本の樹木に集団で産卵
します



シオカラトンボ

(2013.8.16)
オスは成熟すると白粉を
帯びて灰青色になります



クマノミズキの実

2013年10月21日 都留市川棚
西日本に多く分布するということですが、都留市では別種のミズキと同様に、山にふつうに生えています。



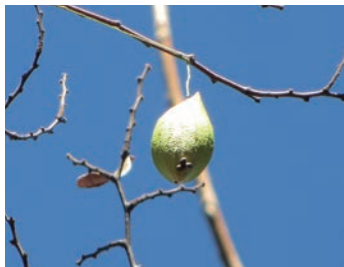
ノビタキ

2013年10月21日 都留市十日市場
ノビタキは春と秋に都留市を通過する渡り鳥です。秋のほうがよく見かけます。



キタテハ

2013年10月18日 都留市上谷
秋に見られるキタテハは、夏型に比べて翅の赤みが強く、切れこみが深いのが特徴です。



ウスタビガの繭

2013年11月13日 都留市田原
繭の上部には、成虫が出るための口、下部には雨水などを出すための穴があります。



クロジの翼

2013年11月2日 都留市上谷
道路の上に片翼だけが落ちていました。捕食者に襲われたのでしょうか。この時期によく見られます。



イチヨウ

2013年10月30日 都留市田原
今まで実をつけなかった本学の自然科学棟前のイチヨウが、今年初めて実をつけました。

身近で見られるドングリ



シラカシ

ドングリの帽子は横縞模様。毎年たくさんの実をつけます



コナラ

コナラのドングリは地上に落ちるとすぐに根を出します



マテバシイ

渋くなく、お団子やクッキーにして食べられます



何度も通い親しんだ場所を、私たちはフィールドと呼んでいます。そのフィールドで観察される生きものや観察のポイントを紹介します。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真

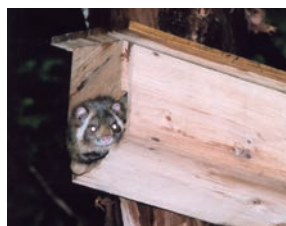
私たちの フィールド・ガイド



①都留文科大学前駅 駅舎
フィールド・ミュージアムの分館として、身近な自然や文化を紹介しています。月に1度の割合で展示替えをしています。



②オオムラサキ
本学附属図書館ビオトープや自然科学棟裏の林などにはオオムラサキの食草となるエノキが植えられています。冬になると、落ち葉の下で幼虫が越冬します。



③ムササビの森
本学に隣接するかたちでムササビの森があります。ムササビ用の巣箱にライブカメラを設置しており、本学のホームページ上でもようすが見られるようになる予定です。



④エゴノキ
この実を食べるのはヤマガラやキジバトなどの鳥類ですが、エゴシギゾウムシやエゴヒゲナガゾウムシという虫は実に産卵をします。また、エゴノネコアシアブラムシは、エゴノキの芽に産卵をします。1本の木でいろんな生きものを観察できるのが、エゴノキの魅力です。

⑤カヤネズミ
都留では6月から10月にかけて、ススキの草原にソフトボールのような巣ができます。フィルムケースに市販のアサの種を入れた餌台を作るとカヤネズミを観察できます。



⑥コウモリ
夜、橋の上から川面をライトで照らすと、モモジロコウモリを観察できます。

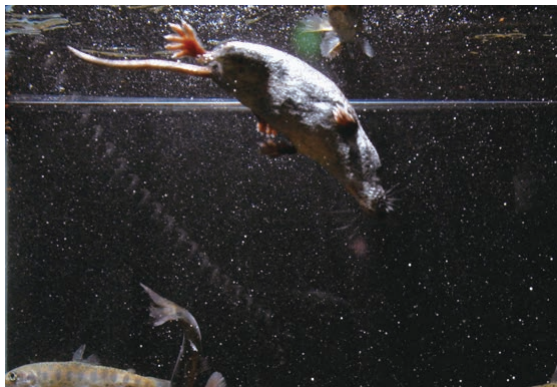




⑪川茂のカモ類

都留市川茂には桂川を堰き止めた川茂ダムがあります。そこでは、おもに秋から春にかけてカモ類が見られます。市内でカモ類がまとまって見られるのはここしかありません。カルガモは1年中見られますが、そのほかの種は冬鳥です。

左上から時計回りに、コガモ、マガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、カルガモ



⑩カワネズミ

水中で魚などを捕らえるモグラの仲間。山間の溪流で暮らしています。昼間も活動することがありますが、おもに夜行性です。淵と瀬が連続するような川岸で観察します。



⑨今宮神社

境内にはケヤキやスギ、アカマツの大木があり、コウモリやムササビが暮らしています。木々が葉を落とす冬には、ムササビの滑空がシルエットで観察できます。

⑧バイカモ

湧水池特有の植物にバイカモがあります。湧水地として、十日市場の長慶寺が有名です。花は5月ごろから11月ごろまで楽しめます。



⑦十日市場のクルミの木

駅に隣接した農地にクルミの木があります。リスもクルミを食べにやってきます。地面には、二つに割れたクルミの食痕が多数落ちています。



出逢う 喜びを求めて

— ナイトハイクを通して知ったこと —

10月10、11日の2日間、私は所属している「うら山観察会」のナイトハイクで本学のうら山に登った。スタッフと招待した家族、10名ほどで17時半ごろ薄暗いうら山に入る。このとき私は観察会だから生きものに逢えて当たり前だと思っていた。

加藤萌香（初等教育学科1年）＝文・写真



変わらない喜び

秋の山はもう寒い。ダウンコートを着て丁度良いぐらいだ。寒さに凍えながら夕暮れのうら山に入った。



まずはムササビの観察だ。薄暗い山道を15分ほど登るとムササビの巣箱が設置されているポイントに到着する。私は以前からムササビが好きだったけれど、今年の初夏に今宮神社で初めてムササビの滑空を観てさらに虜になった（78号参照）。愛くるしい顔つきにふさふさの柔らかい毛。皮膜を広げると意外に大きいところがまた魅力だ。滑空するさいは、両手足からしっぽまできれいにピンツと伸ばし、音もなく飛んでいく。うす暗い空を滑るように飛ぶ姿は幻想的だと思ううつとりしてしまふほど美しい。そんなムササビの姿を見たいと、懐中電灯に赤いセロハンを付けて巣



ムササビの巣箱。すくなくとも木の中腹に巣箱が取り付けられていて、ムササビが顔を出すこともある。

箱を照らす。これはムササビが眩しくないようにするための大事な配慮だ。警戒されないように、静かに待つ。

10分ほどすると待ちに待ったときが来た。ムササビがひよこつと巣箱から顔を出す。暗闇で赤ライトに照らされて双眼がきらきらと光っている姿は少し怖い。こちらをうかがっているのか、なかなか出てこない。一旦巣箱に戻ってしまった。

しばらくして、今度は身体半分まで出してくる。辺りを見まわす姿が可愛らしい。巣箱の入り口に手をかけたかと思うと、すぐにぱつと皮膜を広げて飛んだ。奥の茂みからさがさと音がする。地面に下りたようだ。そのまま近くの木に登っていくムササビを必死に赤ライトで追いかける。もう一度飛ぶ姿を期待したが、そのまま木の葉に紛れて見失ってしまった。

ほかの巣箱も見ているが、出てくるようすはなかった。ムササビ観察はこれで終わりかと名残惜しく思っていたそのとき、後ろの上空を別のムササビが滑空していった。ちらつと見えただけが、再びあの美しい滑空を見ることが叶った。

約束されていない出逢い



次にネズミ小屋に向かう。コンクリートブロックの土台に木の板とガラス戸でできた小屋だ。室内の両端には外へ通じる水槽のえさ場がある。ヒマワリの種やクルミを置き、野ネズミを誘って観察する仕組だ。クルミがなくなっているから、えさ場には来ているようだ。私のなかに、ここに野ネズミが来ているんだという確かな実感がわいた。

野生のネズミを観たことのなかった私は野ネズミの登場を心待ちにしていた。小屋のなかで気づかれないよう、同じ体勢のまま無言で来るのを待った。足がしびれてきても気合いで堪え忍んだ。しかし、15分ほど待っても



(上) ネズミのえさ場はガラス製のため、やってきた野ネズミのようすが観やすくなっている

(下) ネズミ小屋のなかにはストーブが置いてあるので冬でも観察ができる。小屋周辺にはえさ場もある

ちつとも現れる気配はない。結局2日間とも野ネズミには逢えなかった。

闇のなかの発見



その後、さらに山を登る。少し開けた場所で止まり、間隔をあげながら一列に並ぶ。「3分間。全てのライトを消して、静かに森のようすを感じてみましょう」とスタッフが呼びかけた。準備ができたところで一斉にライトを消す。真つ暗な世界が私の周りに広がり、前の人も後ろの人も見えない。近くに何があるかさえ分らない暗闇はまるで別世界だ。ふと上を見ると、淡い青色の空が真つ黒な木々のシルエットの間に広がっていた。

じつと、耳をすます。ムササビの声が向こうから聞こえてきた。虫の声、木々が揺れる音、姿は見えないけど、音でそこに自分たち以外の生きものが存在していることが分かる。その感覚は森に身をゆだねるようで心地いい。

山を下る途中、ホタルに出逢った。本当に光っているのかと思ってしまうほど弱い黄緑色の光が茂みのなかでふわつと柔らかく光つたり消えたりしている。夏だけしかないと思っていたが、後で調べたら秋にもホタルはい

るそうだ。寒い夜の森に見る優しい光は心穏やかな気分になせてくれた。

出逢うときを信じて

簡単だと思っていた生きもののとの出逢いは思っていたよりずつと難しいものだった。じつさい、今回のナイトハイクで野ネズミを観ることはできなかった。残念だけど、たった2日の短い期間で生きものに出逢える保証はどこにもない。私が行けば逢えると思込んでいただけだったのだ。

でも逢うことができなかったからこそ、自分の目で本物を確かめたいという興味は前より強くなった。初めて私がムササビの滑空を観たときのことは今でも心に焼きついている。自分の体の半分ほどもあるネズミが上空を飛んでいく。あまりにも衝撃的だった。そんな想像もできないことが目の前で起る。

だから生きものに出逢ったとき、すぐには起こったことが信じられない。けれど、後からじわじわと喜びがわき上がってくる。その出逢いの瞬間が楽しみだから私は生きものに逢いたいと思う。そしてその気持ちが積もるほど、私は生きものを好きになっていくのだ。



秋の声を聞く

8月も中旬を過ぎたころ。夕方、本学からアパートへ帰るとき、虫が鳴いていることに気がつく。ふだんは聞き流していた虫たちの声を意識して聞いてみると、声の種類が一つではないことが分かった。

10月に入ると虫たちの声はさらに大きくなっていった。声を頼りに秋の鳴く虫に近づいてみよう。

舟田早帆（社会学科1年）＝文・写真

本学コミュニケーションホール横。
10月10日にこのあたりで虫を探した

アオマツムシを追いかける

虫の声が気になったものの、聞こえてくる声が何という名前なのかなんか虫のものなのか、生きものに詳しくないわたしには分からないう。そこでわたしは生きものに詳しい編集部の西教生^{にしのりお}さんに相談し、鳴いている虫についてじつさいに野外へ出て教えてもらった。

10月10日17時30分、コミュニケーションホール横で虫を探す。あたりはもう暗くなっていた。

最初にリリーと高音で澄んだ声が聞こえてきた。小さな鈴を耳元でたくさん鳴らされているようだ。これはアオマツムシの声だそう。木の上に生息するアオマツムシの声はまるで降ってくるように聞こえる。はじめはきれいだと思ったが、同じ声をずっと聞いていると頭が痛くなりそうだ。数も多いらしく、ほかの虫の声を聞こうとしてもアオマツムシの声にかき消されてしまう。西さんに言われるまで、ツツレサセコオロギやエンマコオロギが鳴いていることに気づけなかった。

その後20分ほどアオマツムシの姿を探したが、見つからなかった。声だけは聞こえてく



アオマツムシのメス。鳴くのはオスだけだが、大きさや外見はほぼ同じだ

るのに、姿が見えないというのが悔しい。それに声を聞いただけでは、虫たちがそこにいるという実感がわかない。図鑑で姿を見ても、その気持ちは変わらなかった。自分の目でその姿を確かめたい。そうしなければ虫のことを知っているとは言えないだろう。

それからはアオマツムシの声が耳に入ってくれば、とりあえず立ち止まりその声を注意深く聞くようになった。いそうなところに見当をつけてその姿を探すが、アオマツムシは見つからない。なんだかもあそばれている気分だ。しかし、10月中旬に台風26号が過ぎて気温が下がると、大学周辺にいるはずのアオマツムシはとぜん鳴かなくなってしまう。寒さに耐えられなくなったのだろうか。

声が聞こえなければ探し方がない、とわたしは今年のうちにアオマツムシに会うことをあきらめていた。

11月5日、本学自然科学棟の外階段にアオマツムシらしき虫がいたと知り合いが教えてくれた。その場所に向かうと、きれいな緑色をした細長い虫がいた。アオマツムシに間違いない、図鑑で見た通りの姿だ。自分で見つけられなかったことは悔しいが、ずっと探していただけに出会えたことが嬉しかった。

コオロギの声を辿って

10月18日、私が住んでいる上谷のアパートの畑からコオロギの鳴く声が聞こえるので探してみることにした。

11時40分ごろ昼は夜よりも鳴いている虫が少ないので一つひとつの声を拾いやすい。鳴きかたは少し不規則だが、丸みを帯びた高すぎない声が耳にやさしい。心地よくていくらかでも聞いていられそうだ。探しているとリリリリリ、リ、リ……という声に合わせて、カチカチとなにかを弾くような音が聞こえてきた。何の音かは分からない。けれど離れたところからは聞こえなかった音が聞こえるよ

うになると、コオロギに近づけた気になる。声の主はもうすぐそこにいるようだ。

コゴメギクの葉をめくると、根元にエンマコオロギがいた。やつと見つけた、という達成感がわいてくる。いつぼうのエンマコオロギは驚いてしまったのか、翅を浮かせたまま動かない。写真を撮り、ほかにも虫がいないか探してみた。その後、声を頼りにツヅレサセコオロギともう一匹エンマコオロギを見つけた。ツヅレサセコオロギはリリリ、リリリと規則的でせわしそうに鳴く。大きさはエンマコオロギにくらべて小さめだった。

この日気づいたことがあった。最初わたしはコオロギはどの種類も枯れ葉に隠れているのだろうと思いこみ、枯れ葉の集まったところ



エンマコオロギのオス。身近に生息するコオロギのなかではもっとも大きい

ろばかりを探していた。以前コオロギが枯れ葉の上にいるのを見たことがあったからだ。ところがそういつたところで見つかるのはツヅレサセコオロギばかりで、エンマコオロギは青々とした植物に隠れていた。この日見つけた三匹が偶然そうだっただけかもしれないが、これは自分の耳を頼りに探したから知れたことだ。

声を聞き、見えた姿

ただ声を聞き、図鑑でその姿を見ても、わたしのなかでは想像上の、ぼんやりとした存在だった秋の鳴く虫たち。けれど自然のなかで暮らすほんものの彼らの姿を見ることで、虫たちは確かに身近で生きているのだと、わたしのなかではつきりとした存在になった。

罌を仕掛けて捕まえたり、虫かごに閉じ込めて観察したりするのではなく、声だけを頼りに虫たちに近づいたから、わたしは彼らありのままの姿を見られたのだと思う。はじめは虫たちに近づきつけに過ぎなかった虫の声は、わたしが彼らに近づいたための大切な手がかりとなっていたのだ。

センサーカメラが写した動物たち

都留文科大学フィールド・ミュージアムでは、
都留市内にセンサーカメラを設置して動物の調査をしています。
ここでは、7～10月に都留市上谷（大学周辺）で撮影された動物を紹介します。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真

トピックス！

カモシカが再び確認され、夏場も平地に
姿をあらわすことが明らかになりました。
もうひとつはミゾゴイ。本種は環境省の
レッドデータブックで絶滅危惧種に指定
されています。9月に撮影されたことから、
渡りの途中だったのかもしれません。



カモシカ 2013年7月23日
5月に引き続き、カモシカが確認されました。
カモシカは国の特別天然記念物です。



ミゾゴイ 2013年9月6日
ミゾゴイはサギの仲間で、森林で繁殖する夏鳥です。
大学の周辺では初めて撮影されました。



センサーカメラは、このように山に
設置します。カメラの前を動物が横
切ると、写真が撮れる仕組みです。



タヌキ 2013年9月23日

タヌキはこの場所では常連さん。毎年、秋から冬にかけてよく撮影されます。



ニホンジカ 2013年9月27日

ニホンジカは近年、鳴き声やフンが確認されていました。センサーカメラにもしばしば写ります。



ニホンリス 2013年9月30日

樹上だけではなく、地上も利用します。ニホンリスを観察するなら、早朝がいいでしょう。



ネコ 2013年10月18日

この模様のネコは、比較的最近、出現するようになりました。大学の周辺に生息しているのでしょうか。



アカネズミ 2013年10月21日

センサーカメラから地面までの距離が近いと、野ネズミが写るようになります。



ハクビシン 2013年10月25日

ネコのような細身の体型のハクビシン。まれに記録されます。



特集を終えて

やさしいものの見方へ

生きものとの出会いは、
けっして約束されたものではありません。

だからこそ私たちは同じ場所に何度もかよい、
ときには近づき方を変えながら
出会いの瞬間を待ちつづけます。

時間をかけ、静かに問いかけてみる。
その経験はやがて
人それぞれの「工夫」へと実を結んでいきました。

そして、私たちは気づきます。
さまざまな工夫の背景には、
じつは一貫して共通しているものがあったのです。

それは、生きものたちの視点に立って
どこまでも相手の暮らしを尊重すること。
いつでも相手を思いやること。

音をたてないようにしてみよう
じっと動かず待ってみよう
距離を保って観てみよう

生きものに近づくための工夫から
私たちは、相手に寄りそう
やさしいものの見方を学びました。

— 特集 —
生きものに近づく
ための工夫

ムササビ観察の夜
2013 年 11 月 30 日 都留市鹿留 今宮神社の境内

「つくる」をみつめる ―第5篇―

感謝のプレゼント



相手のことを考えて「つくる」。
つくられたものを通して、つくり
手がこめた思いがみえてきた。

前澤志依（国文学科4年）＝文・写真



「和服リフォーム」した服を紹介してくださる金勝さん。ハキハキとしゃべり、笑顔がたえないかただ

昨年6月3日、都留市谷村にあるミュージアム都留で開かれた「第9回 和服リフォームファッションショー」を見に行った。参加されたモデルさんのなかに、お揃いの服を着て花道を歩く親子の姿があった。お子さんの祖母にあたるかたが服をつくられたという。つくってもらった服を着ながら、とても嬉しそうな表情で堂々と歩く親子の姿が今でも私の記憶に残っている。あのときの服をつくったかたは、どんなことを考えてつくったのだろう。渡したい相手のためにつくることには、どういう思いがこめられているのだろう。今年10月21日、その親子の服をつくられた金勝^{かねがちのりえ}紀恵さん（74）にお話をうかがった。

都留市下谷にある金勝さんのご自宅を訪ねる。玄関を入ってすぐ左の部屋が金勝さんの作業場だ。8畳くらいの部屋には、壁側にぎつしりと服や編み物が置いてあった。これらは金勝さんがつくられたものだ。

小学生になる前から洋裁に興味があった金勝さん。高校を卒業された後、本格的に洋裁の勉強をして講師も勤められた。ご結婚されたのを機に講師を辞められたが、「もつてい

る技術を使わなきゃもったいない」と思い、その後も洋裁を続け、その傍らで編み物も習い、今ではご自宅で洋裁と編み物の教室を開いている。

長年のあいだ洋裁と編み物を続けている金勝さんに、今まで続けてこられた理由をうかがうと、「(つくっているときの)環境が違ったら飽きないのよ、自分が。その人(渡したい人)の要求に合わせてつくるから楽しいんだよね」との答えが返ってきた。同じ種類の服でも渡す相手によって使う材料の組み合わせや色、大きさなども違う。自分で考えて工夫をしながら、相手に合ったものをつくりだせるのが手づくりの醍醐味だ。どうしたらその人の要求に応えられるのか、それを楽しみながら考えているから、金勝さんは今も洋裁や編み物を続けているのだろう。

「交流のお返し」

金勝さんがつくったものを見せていただく。「これは孫に編んでるの。今年の冬は冷えるっていうから」「これは娘がピアノの発表会だっていうからつくったドレス」と一つひとつを紹介していただくなかで、ご家族に

向けてつくられたものだという話を多く聞いた。私がご家族に向けてよくつくられるんですかと聞くと、「だって可愛いものを(娘や孫に)着せたいじゃない」とすぐに笑顔でおっしゃる。お孫さんに向けて浴衣から服をつくる時も、なるべく柄の大きさが細かくて可愛いものを選んだり、洗濯がしやすいように木綿を選んだりして工夫をしているそう。

ご家族の反応もうかがった。たとえば、浴衣からつくったパジャマを、ご主人は夏のあいだ大切にしていたらしい。お孫さんは毎日のように、つくってもらったエプロンをつけたいから料理の手伝いをしたいとよく言っているそう。金勝さんのご家族が、金勝さんがつくった服を喜んで着ている姿が想像できて微笑ましい。「うちの家族っておもしろいよね」と度々おっしゃる金勝さんはとても嬉しそうな表情をされていた。金勝さんのご家族への愛情が伝わってくる。

「たとえば、お野菜とかもらったお礼に(手づくりのものを)プレゼントすると喜んでくれるよね」とおっしゃる金勝さんにとって、渡したい相手を思いつくことは、「交流のお返し」だという。その人のことが好きだから

ら喜んでもらいたいという思いが、金勝さんがつくったものにはこめられている。

取材後、「交流のお返し」に金勝さんから手づくりのティッシュケースや巾着袋、マフラーをいただいた。そのとき私は、嬉しい気持ちでいっぱいになり、自然と笑みがこぼれた。そのあとも、いただいたものを毎日のように大切に使っている。こうしても、のを通し、つくった人ともう人とお互いの気持ちを通じ合っているのかなと思う。渡したい相手も思いつくこと、そこには人とのつき合いを大切にする「ありがとう」の気持ちがカタチとなって表れているのだ。



金勝さんの作業場。40年間以上続けていらっしゃる洋裁と編み物教室の教室でもある

自分の決めた道へ進む

生い茂る植物の陰にひっそりと隠れるようにして佇んでいるお店。ドールハウスのようなその建物に惹かれ立ち寄ってみるけれど、そこはいつ来ても「CLOSE」の看板が掛けられていた。
このお店をきっかけに出会ったのは、やりたいこととまっすぐなからだだった。



上：深澤良美さん。お話し中に見せる笑顔が魅力的だ

左：いつも掛けられていた「CLOSE」の看板。お店の入口の左側に掛けられている

深澤さんとの出会い

「ギャラリー喫茶ビアンカ」、このお店を経営していたのは深澤良美さん（53）。経営していたと過去形にしたのは、2007年にビアンカは閉店したからだ。

私は入学したばかりのころ、なにげなく歩いているときに、このお店を見つけた。「ギャラリー喫茶」という聞き慣れない名前、あたりの風景とは異なる洋風の建物。それからずっと、このお店はなんだろうと思うようになり、何度か足を運ぶも、「CLOSE」の看板が下ろされることはなかった。ますますこのお店が気になった私は、意を決して近くのお宅のかたにうかがってみた。すると、このお店はすでに閉店しているとのこと。経営していたかたのお名前と連絡先を教えてくださいましたので、お話を聞くべく電話をかけました。見ず知らずの私がいきなり電話をして大丈夫だろうかという不安もあったけれど、電話越しの深澤さんは快く取材を引き受けてくださいました。

10月20日、この日は靴がずぶ濡れになるくらいひどい雨だった。寒さに耐えながらピア

ンカに向かうと、いつ来ても閉まっていた深緑色の扉が開いている。店内はどうなっているのだろうと恐るおそる覗き込んでみる。するとそこには、可愛らしい洋風の雑貨と、木で作られた小さめのテーブルや椅子があった。暖色の明かりに照らされた店内は、カントリ調にまとめられている。素朴であたたかな雰囲気はさつきまでの寒さを忘れさせてくれるようだ。

私が店内に釘付けになっているとき、深澤さんがお店の奥から出て来られた。私が想像していたよりも若々しく、お店の雰囲気合うおしゃれな服を着ている。

入口で初めて深澤さんにお会いしたときから席に着くまで、ごくありふれた世間話しかしていない。けれど私は、そのあいだのちょっとした深澤さんの言葉や動作のなかに「ぴしっとしたなにか」を感じた。

ピアンカの開店とその後

まずは深澤さんにピアンカを始めた経緯をうかがう。

深澤さんは、偶然もらった雑誌で初めてカントリー雑貨というものを知り、その魅力に

惹かれた。けれど、10年ほど前の都留市ではカントリー雑貨はあまり知られていなかった。そこで、素敵な雑貨があることを伝えたいと思った深澤さんは、2000年にピアンカを開いたのだ。そんなお店へのこだわりは、自らの目で見て好きだと思ったものを置くことだったそう。ただ、小さな個人のお店には商品を卸してくれない問屋さんもあった。それでも深澤さんは、問屋さんの理解をえるために、どこで何をどうやりたいのかといったお店への熱意を語って商品を仕入れていたそう。

「これはもう熱意だと思って。絶対これ（お店）はやりたいって、その思いだけで突っ走って」と笑いながらおっしゃる深澤さんは、困難すらも楽しんでいたかのようだ。

最初は雑貨屋さんとしてできたピアンカだったが、開店から6年後にはギャラリィ喫茶へと改装する。売る雑貨の数を減らすことで、お茶を飲みながらおしゃべりができるような場所に変わっていった。そこには、家庭外で人とのつながりを持つのが難しい主婦にとつての憩いの場となれば、という深澤さんの思いが込められていたのだ。



ピアンカの店内。雑貨が並ぶ棚は深澤さんのお父さんの手作り。わざわざ深澤さんが経営当時のようすを再現してくださった

けれどビアンカは2007年に閉店してしまふ。そのころになると都留市にもカントリー雑貨を手に入れられるような大型量販店ができていた。

深澤さんに、閉店の理由を尋ねてみる。すると、「どこか見つけに行つて出したいつていう雑貨がもうそんなにないなあと思ったから、じゃあここらへんで終わりにしようと思つて」とさりととおっしゃつた。深澤さんは、惜しむ気持ちや後悔はなく7年間自分のやりたいことをやりきつた、そんな気持ちで「ギャラリー喫茶ビアンカ」に幕を下ろしたのだつた。

やりたいことに一直線で進む

お客さんのなかには深澤さんのように自分のお店を持ちたいと思つていたかたも少なくなかつた。けれど深澤さんがおっしゃるには、十数年前は女性が自分で何かを始めることが少なかつたそう。だからお店を開きたいと思つていても、じつさいにするには勇気が必要なこともあつたのだ。

そんななか深澤さんは、主婦が何かを始めるといふ道を先頭に立つて切り拓いていく。



深澤さんとお店の常連だったお客さん。今でもつながりは途絶えていない(舟田早帆=写真)

まわりの人がこうだから、世間がこうだからではなく、自分がしたいと思つたことに一直線に進んでいた。誰もしていないことをするというのはとても勇気のいることなのに、なぜ深澤さんはこんなにも行動に移せるのだろうか。深澤さんは言う。

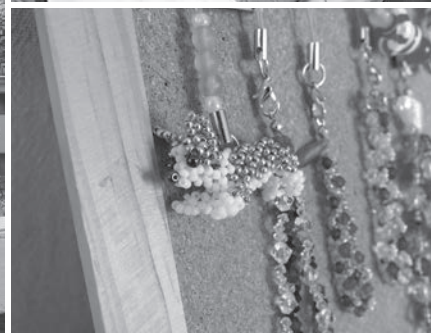
「とにかく、あの時こうしたかつたなあつていうのだけは嫌なんです。50過ぎたら余計にそれは思ふんですよ、それだけは。やりたいとか、好きつてことはやつとかなないと」

深澤さんはいつでも好きなことにまっしぐらだ。

深澤さんと初めて会つたときに感じた「ぴしつとしたなにか」。どうしてそう感じたのか初めはわからなかつた。けれど、深澤さんと話しているうちにわかつてきたことがある。それは、深澤さんはどんな質問をされてもいつも明確な言葉ですぐに答えを返すということだ。

これは、聞かれたことについて深い思いを持つていなければならない。思い返せば、開店したとき、改装したとき、閉店したときなど、ビアンカに起こつたすべての出来事に深澤さんの強い思いが反映されていた。そして、これほど強い思いを持てるのは、深澤さんのなかにやりたいという気持ちがいつでもあつたからだと思つた。

だから、あのとき感じた「ぴしつとしたなにか」は深澤さんのやりたいと思う強い気持ちの表れだつたのだろう。好きなことに本気になれる、やりたいという思いに正直になつて一心に進む、そんなふうに夢中になつて道を切り拓いていく深澤さんの姿がかつこよかつた。



地域で働く 地域と生きる



上段左：「いちごいちえ」外観／右上：販売中の雑貨。取材に行った日には 14 種類の商品が並んでいた／
右下：ビーズでできた手作りの犬のストラップ／下段：お豆腐は 1 丁 180 円

国道 139 号線沿い、谷村工業高等学校のほど近く、1 階の壁がほとんど窓になっているちょっと不思議な建物。私は毎日、通学途中にこの建物の前を通るのだが、一見するとなにかの事務所のように、そこで働く人たちがいったいなにをしているのか気になっていた。

そんなある日、偶然食べたお豆腐がきっかけで、私はそこで働く人たちを知る。

金原由佳（社会学科 1 年）＝文・写真

あ

る日、母が買ってきてくれたお豆腐は、いつもスーパーで買うものと違っ

ていた。すこし歪な形で、箸で持ち上げてもあまり崩れない。そして、口に広がる大豆の甘み。このお豆腐は地域イベントに出店していた「いちごいちえ」で買ったものらしい。くわしく聞くと、その施設は私が気にしていたあの建物のなかにあった。

私は「いちごいちえ」がどんなところか興味があり、10月18日にそこを訪ねてみた。

扉を開けると、20名ほどの人たちがいくつかのグループに分かれて大きなテーブルを囲み、ふきんに刺繍^{しゅう}をしたりビーズでストラップを作ったりしているのが目に入った。談笑する声も楽しげだ。

なかに進むと、奥から「いちごいちえ」の施設長をされている山岸公人^{やまぎしこうひと}さん（56）と奥さんのゆかりさん（43）が笑顔で出迎えてくださる。挨拶をかわしてすぐ「緊張するなあ」と照れ笑いを浮かべた公人さんにつられ、私も笑ってしまった。お二人は事業所についての資料を事前に用意してくださっていた。「お喋りが上手じゃないの」と公人さん。資料を見つつお話をしてくださった。

「いちごいちえ」というところ

「いちごいちえ」は公人さんをはじめ6名のスタッフと、34名のさまざまな障がいをもつかたが登録、在籍なさっている。障がい者のかたがたは就労へ向けた知識の習得や、実践的な学習に取り組んでいる。その8割は精神障がいのかただそう。

「いちごいちえ」ではさまざまな商品を作り販売している。私が食べたあのお豆腐は、市の工房を借り、週に一回25丁が作られている。事前に予約注文をしていくお客さんが多く、ほとんどがそれで売り切れてしまうとのこと。また、最初に見た刺繍のふきんやビーズのストラップのほかに、手作りのお菓子などの販売もしている。



豆腐作りのようす。10以上ある工程を順序よくてきばきとこなされていた

このようにたくさんの商品を展開しているのは、いろいろな作業のなかで個人の性格にあった仕事を見つけるためだそう。私はそこに、公人さんたちが一人ひとりの性格や力をしっかりと見つけ、引き出そうとする思いを感じた。

受け止められる場所になる

「いちごいちえは、精神障がいのかたの就労と生活を支援する事業所ということでスタートしたんです」。「いちごいちえ」を立ち上げた理由をうかがうと、公人さんは感慨深げにお話をしてくださった。

公人さんは大学生のころ、京都でさまざまな障がいをもつ学生の在宅支援をしてきた。大学を卒業後、精神科の病院でソーシャルワーカー[※]をしているとき、精神障がいのかたの支援をはじめ、障がいをもつかたがたとの関わりを深めていったそう。

「精神障がいのかたってね。現在でもそうなんですけども、なかなかこう、理解をえにくいと。一見すると、ぜんぜん健常者の人と（見た目は）かわらないじゃないか、という理解認識のされかたをするもんですから」



公人さんとゆかりさん。「いちごいちえ」の入口にて

現在、障がい者への福祉制度やサービスはある程度整ってきた。知的障がい、身体障がいのかたへは、福祉サービスを利用できる施設も増えてきている。けれど精神障がいや発達障がいなどのかたへはそういった受け皿があまりにない。

そこで、受け皿となれる事業所を自分たちで地域に作ろうと考え、ゆかりさんの地元である都留市で開業したのだ。

現在、就労支援では、一般企業からの支援や、ほかのNPO法人と協同で事業をおこなうことが多くなったそう。豆腐作りやお菓子作りのさいには、地域のお店のかたに作りかたを教わったという。技術を教わり商品を作ること、地域産業の活性化にも繋がれば、と公人さんは語ってくださった。

「いちごいちえ」の想い

最後に、お二人へ今後の方針についてお聞きする。さまざまな構想のなかで、一貫しているのは「働く姿を地域の人に見ていただく」という想いだ。イベントなどで働く姿を見てもらい、地域のかたから理解をえることで、障がいのある人の働きやすい環境になっ

ていつてほしいと願っている。そのためには、イベントへの出店や本学をはじめとする周辺大学への訪問販売を積極的に進めていきたいとおっしゃっていた。

これまで私は、福祉活動に関わるには特別な知識や行動が必要なのだと思い込んでいた。そのため、ずっと福祉は難しいものだというイメージを抱いていた。そんな私に「活動を知ること」も福祉活動の助けになるのだと「いちごいちえ」は教えてくれた。

私は同じ地域に生きる一人として、「いちごいちえ」を応援したいと思う。そのためにまず私にできるのは、身近な友人や家族に「いちごいちえ」のことや福祉活動のことを伝えることだ。そのことが、「いちごいちえ」を知るきっかけや、福祉活動への興味をもつきっかけになればと思うのだ。

※社会福祉活動に従事する専門職の総称

「就労支援センター いちごいちえ」

定休日…土曜・日曜・祝日

電話…0554(56)7920

営業時間…午前9時～午後4時

起き上がる朝



— 学びの場での向き合いかた —

都留市にお住まいの遠藤静江さん（81）は40年間教員を勤め、多くの子どもや保護者、先生と関わってきました。さまざまな取り組みをしながら「教育」について考えてきた遠藤さんにとって、教員生活で生きがいを感じたことはどんなことだったのでしょうか。

生

生きがいつていうかな、子どもたちにとって関わってきたか。子どもたちの可能性を伸ばしてあげて、助言とか指導ができて、その子どもがわかったとか、よかったとかそういうふうに感じてくれる指導を心掛けた。そういう時に、ああよかったなと思うの。

教えたことによって子どもたちがわかる。わかるっていうのは喜びをとまなうっていうわけ。わからなきや嬉しくないよね。わかると学ぶことが楽しくなるの。そういうことを子どもが理解できるように教材研究をする。その結果、子どもにやらせてみたら、子どもが理解できてすごく喜んだ。その子どもがわかってくれたとき、こつちも教えがいがあった。

たとえ、よかったって思うでしょ。そういうふうにするってことをかなりしてきたね。

私が谷村第二小学校へ行ったとき、子どもがすごく荒れてた。みんなでこれをなんとかしなければって言って、そこで先生たちが意思統一したの。みんなを取り組んだ。

それで、もうちよつと内面化（心や感性を豊かにすること）していきこうってことになったの。

どういう面で内面化するかっていうことで、各学年にある教科書の文学作品をきちんと勉強するところからやっていきこうって。人間の内面化をはかるのは文学作品で取り上げてくのがいいんじゃないかって。

ところが、教科書ってのはかなり紙面を限定されているから、原作でない（全文が載って

いない）場合が多かった。とくに高学年ではいっぱいある。どこを抜いてダイジェスト化しているかっていう研究を先生たちがしていくと、ほとんど情景描写なの。文学作品のなかで情景描写がしめる割合とか、それが作品に及ぼす影響についてみんなで研究したの。

やりがいを感じる

たとえば、人が恋をすると景色まで輝いて見える。そういうふうには自分の心をおして景色を見る。悲しいときは景色まで悲しく見える。情景と作品の登場人物っていうのは、切っても切れない関係にあるって。その情景を全部抜いたら、味も素っ気もないって。

とびらのことば



くりくり かがやいた目

「ほら その目に、みどりの山が、青いお空が、白い雲が、おしくらまんじゅうして、つまっているよ」

「ほんとだ」「ほんとだ」

「じっとみてごらん」

ぼくの目にうつった ほんとうのこと、わたしのかんがえた ほんとうのこと それを、じっとしまっておかないで

みんなに はなしてごらん
どんなときも

どんなことでも。

——『小さいぬ』より 遠藤静江・作



文集『小さいぬ』。昭和38年度の谷村第二小学校2年生が書いた作文集。この学年が本文中で触れている「文学作品からの内面化」を初めて実践した学年。

冒頭には右の遠藤さんの詩が載っており、自分の思いや考えを話すことも、内面化していくうえで大切だという思いもこめられている

だから文学作品で、子どもたちをきちんと内面化しようって言ったときにそれ（ダイジェスト化された作品）じゃまずいってなつて、私たち全部原作でやったの。ところが、昭和37年ごろはFAX（※）なんてないのよ。でも近くの高校にFAXがあった。だから（原作の）本を切つてFAXにかけてもらつて、先生たちで印刷して、それで授業をした。

授業研究をするなかで子どもたちがものすごくしつかり文学作品を読むようになった。登場人物の心情や生きかたにふれ、感動したり、自分たちと比べたりしながら作品を読むようになった。

研究については、教師集団がものすごくがつちり頑張つた。今日私が授業するから見に来てとか、今度よその学校の先生たちに、国語の文学作品を取り上げるから来てくださとか、ほうぼうの学校に行つたりとか、自主的に研究をしたの。

そのような学習のなかで子どもが、ものすごくやる気が出て、勉強するようになって、勉強することを喜びとしてきた。そのことは教える側として、非常にやりがいのあることなのよ。



遠藤静江さん
（えんどう・しずえ）

昭和7年11月23日生まれ。昭和28年から平成元年3月まで都留市内の小学校で教員を勤める。退職後、都留市周辺の小中学校で非常勤講師を66歳まで勤めた。得意科目は国語と書道。学級づくりの柱のひとつに詩の読み書きをおいていた。上のイラストはご本人に描いていただいた。

子どもたちがどういうふうにしたらやる気になるか、そしてマスターするためには、教材研究をどういうふうにしていったらいいのかとか、それを個々でなくて、学級全体ができるためにはどうするか。やっぱり自分だけの力じゃなくて、先生たちがまとまって一緒に研究したからできたと思うのね。自分だけで文学作品なんて言つたつてだめよね。学校は教師集団の在りかたによつて、子どもたちはずいぶん違つてくるよね。自分が研究して、指導して、子どもたちがよくなつて、ともに喜びあえるつてそういうことができたら、教師冥利に尽きるつていうのか。そう思うね。

※印刷機にかける原紙をつくる機械。「謄写FAX」と呼ばれていた



富士道みちを歩く

2013

第3回

『富士山道しるべ』を読む

牛丸景太（国文学科4年）＝文・写真
『フィールド・ノート』編集部＝写真

一本の道をじっくり歩きながら、土地の歴史や民俗を探索する。それが、「富士道を歩く会」だ。昨年5月に大月市を出発し、目指すは富士吉田市の「北口本宮富士浅間神社」。毎回3時間ほどを目安に、案内役の都留市郷土研究会の皆さんと古道を辿っていく。

今回は江戸時代出版された『富士山道しるべ』から富士道に迫ってみたい。いまから150年以上前の「ガイドブック」には、沿道の地域がどのように描かれているだろうか。じっさいに手にとって、書物のなかを探検してみよう。

旅の道のりと心得

『富士山道しるべ』は、富士山参拝のための案内記。松園梅彦著、玉蘭斎貞秀画、万延元年（1860）刊行。

江戸から吉田（北口）までの道のりを示すとともに、入山料や駕籠賃、各地の見所やお土産なども紹介。参拝のさいの心得を細かく記している。



本学附属図書館では「前編」を閲覧することができる

案内記が捉えた地域の姿

『富士山道しるべ』が刊行された万延元年は、60年に一度めぐってくる富士山ご縁年の年。この年に登拝すれば、1回で33回分のご利益が得られるとされている。そのため、ご縁年はとくに参詣者が多く、本書はその需要を見込んで刊行されたようだ。

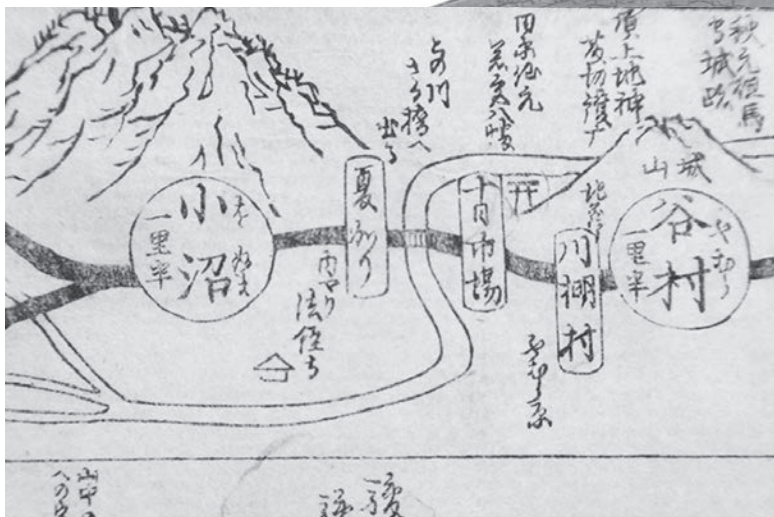
冊子は縦11cm・横16cmと小ぶりのサイズ。内容は、簡潔な文章に淡々とした筆致の絵図が特徴だ。現在本学が建っている場所はそのように記されているのか、谷村の周辺を少し覗いてみることにしよう。

凡例によれば、丸印は宿場を、白い線が川を、黒い線が道を表している。谷村から小沼にかけては、「川棚」「十日市場」「夏かり」など、現代でも使われている地名が並び、「城山」と書かれた勝山城趾が背後に控えている。川棚の脇に記された「やむら原」は穀倉地帯を示しているのだろうか。夏狩と小沼のあいだにちょこんと書きこまれた「内マリ法経寺」は、東桂の宝鏡寺のことだと思われる。方角や縮約はほとんど当てにできないし、真実を求める限りは頼りにならないけれど、こ

*参考文献

『富士山道しるべを歩く 改』富士吉田市立歴史民俗博物館、2010 年

『都留市地名事典』都留市郷土研究会、2012 年



谷村周辺が記された 10 丁ウラ。
川が城山の奥へ回りこんでいる
が、じっさいは手前を流れる

右：『富士山道しるべ』には、
ところどころに折りたたみ式
の絵図も綴じ合わされている

左：第 9 回（2013. 04. 27）で訪
れた田原神社。境内が国道の用
地になる以前は、参道にたくさ
んの露店が並び、にぎやかなお
祭りがおこなわれたという



これらの記述は当時の人々の認識を知るうえで
とても興味深い。

なかには表記が間違っていたり、位置関係
がじつさいとは異なっていたりすることもある。
しかし、この地を訪れる旅人に対して何
を紹介すべきとされていたのか、つまり何が
主要なものと考えられていたのかを知るため
のよい手がかりになる。旅人に知らせる情報
は、無駄なく精選されているほうが好ましい。
ここに描かれているのは、いわば端的に捉え
られた地域の姿といえるだろう。

もつとも、地域史を紐解くうえでも参考にな
る点はある。たとえば十日市場の右側に描
かれた神社記号には、真上に「田原瀧元 若
宮八幡」という注記が加えられている。これ
は現在の田原神社をさす名称で、大正 7 年
(1918) まで用いられていた。いまでも
お年寄りを中心に、田原神社を「八幡さん」
と呼ぶ人がいる（第 9 回「富士道を歩く会」で
の聞き取りより）。

江戸時代の文献は、古い呼び名の元となっ
た当時の社名と、「八幡さん」と呼ばれ親し
まれてきた時間の長さを示してくれるのだ。



ムササビライブカメラが設置されました（11月28日）



自然科学棟のロビーにあるモニターからも映像を見ることができます

本学のキャンパスにはムササビが暮らしています。多くの人の観察でムササビの生態を明らかにしようと、2009年3月12日、巣箱にライブカメラを設置し、本学のホームページで映像の公開を開始しました。機材の故障で一時放映を中断していましたが、先日新たにライブカメラを設置しました。近々に映像を公開する予定です。楽しみにお待ちください。

（北垣憲仁）

楽山で栗拾いをしました（9月28日）

拾った栗は栗ごはんにし、美味しくいただきました。

甲斐絹展を見にいきました（10月12日）

ミュージアム都留で開催された特別展「甲斐絹展」（9月22日～10月27日）を観覧してきました。



第25回詩画展の開催（10月18日～20日）

遠藤静江さんが会長を務める都留詩友会の「詩画展」が都留市ふるさと会館で開催されました。



駅の展示替え（10月24日）

都留文科大学前駅の展示パネルを交換しました。

上：甲斐絹展 / 下：詩画展

道志村からのお便り

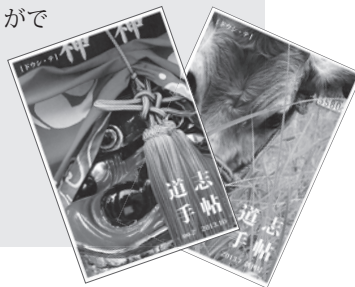
フィールド・ノート編集部を卒業した香西恵^{こうさいけい}と申します。この春から都留市のお隣の道志村で「道志村地域おこし協力隊」として活動しています。

協力隊とは総務省による事業で、都市部の若者が地方に移り住み、地域おこしの活動をしながら3年後の定住を目的とするものです。道志村では今年から5名が協力隊として活動しています。活動内容は、森林資源を利用した仕事おこしや「しょうゆ搾り」文化の継承などさまざまです。そのひとつとして、このたび『道志手帖』という季刊誌を創刊しました。協力隊の目線から村の魅力を発信することや、隊員の活動報告を目的に発行しています。

編集部での経験を活かしつつ、多くの人に読んでもらえる冊子を目指して奮闘中です。本誌は村内の各種施設のほか、山梨県立図書館、協力隊ホームページでご覧いただくことができます。道志って？ 協力隊って？ ぜひ一度手に取っていただければ幸いです。

（お問い合わせ）道志村地域おこし協力隊

電話：0554-52-2118 HP: <http://www.doshi-okoshi.com>





FIELD・NOTE NEWS 2013. 09 - 12

2013 年 9 月から 12 月までの『フィールド・ノート』
編集部での活動のようすやできごとをお伝えします。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真



稲の収穫（9 月 28 日）

本学 OG で都留市在住の羽野幸さんのたんぼで稲刈りのお手伝いをさせていただきました。地元の子どもからお年寄りのかたまで総勢 16 名でおこなった作業は、コンバインで刈り残した稲を鎌で刈り、束ねるというものです。束ねる作業はなかなか難しく苦戦しましたが、ベテランの皆さんに教えていただくことでなんとか形にすることができました。きれいに並んだハザは秋の実りを感じさせるものでした。

（伊藤留依）



後日脱穀した新米をいただきました



えさ台・巣箱の製作（10 月～12 月）



電動のネジ回しなど、慣れない機材の扱いに苦戦しました

リスの巣箱とえさ台、ムササビの巣箱をつくりました。断面が歪まないようにのこぎりで木材を切り、ネジが垂直になるように注意しながら木材どうしを固定するなど、根気のいる作業でした。リスのえさ台は「リスを呼ぶ会」の活動の一環としてキャンパス内に設置されます。私たちがリスやムササビを気軽に観察できる場となり、野生の生きものに近づくよい機会となることを期待しています。（舟田早帆）



リスのえさ台設置完了！（12 月 3 日）

「リスを呼ぶ会」の会員のかたがたでえさ台の取り付け作業をおこないました。設置場所は楽山公園の入り口と本学自然科学棟の横の 2 ヶ所です。設置されたえさ台には、リスのえさとしてクルミやヒマワリの種が置かれました。これから会員一同、えさ台に来るリスを見守っていきます。みなさんも時間に余裕があるときはえさ台を見にきてください。リスと出会えるかもしれません。

（加藤萌香）



えさ台には熊太郎稲荷神社から拾ってきたクルミが置かれました



発行人
北垣憲仁 (8-10,22-23)
統括編集者
西教生 (11-13,28-29)
編集長
牛丸景太 (2-3,16-17,30-31,42-43)
前澤志依 (6-7,32-33,40-41)
副編集長
別符沙都樹 (20-23)
編集
廣瀬はづ紀 (14-15)
伊藤瑠依 (34-36,46-47)
加藤萌香 (1,24-25,48)
金原由佳 (4-5,37-39)
舟田早帆 (26-27,44-45)
ロゴデザイン
工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELDNOTE (フィールド・ノート) 79 号
発行日: 2013 年 12 月 21 日
発行部数: 500 部
発行・編集:
〒402-8555
山梨県都留市田原 3-8-1
都留文科大学
コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート』編集部
E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学コミュニケーションホール地下1階の地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

編集後記 故郷での冬の過ごし方



きょうの冬は、いつもイルミネーションとともに思
い出されます。隣町に大きな植物園があって、そ
こが11月中旬ごろになると、色とりどりの電飾で飾られ
ていくのです。植物園には、雪吊りされた木よりも電飾が
飾られた木のほうが多いようでした。イルミネーションを
見られるのは通学途中の電車のなかだけでしたが、増えて
いく光を見るのはなにより冬の楽しみでした。

(金原由佳)

たのしく友人と話しながら学校のストーブにあたっ
ていました。とくに去年は受験もあり、友人とストー
ブの前で暖まりながら、問題を出し合うのが日課でした。
私の高校は昔ながらのえんとつ付きの石油ストーブだった
ので、周辺しか暖まりません。だから自然とストーブの周
りには人が集まってきました。つらい受験期をみんなで乗
り越えた思い出は、今振り返ると、なつかしく、頑張った
なあと、あのころの日々を愛しく感じます。

(加藤萌香)

つめたい「八ヶ岳おろし」が吹き荒れる故郷は、人
家が少なく周囲に明かりがないので、夜空の星や
月がきれいに見えます。そのため、いつしか夜空を見上げ
ることが無意識のうちに習慣になっていました。星座が見
たいという目的がとくにあるわけではありません。ただ
ただ夜空に輝く月を見てはきれいだなとぼーっと眺めていま
す。どこでもできることではありますが、故郷の夜空には、
なんだかほっとするものがあります。

(廣瀬はづ紀)



次回予告

時

(仮)

24時間のなかにさまざまな営みがある

朝に咲く花、昼に働く人、夜に現れる動物

都留の1日を見つめてみる

2014 年 3 月 発行予定

FIELD・NOTE

no.79

発行日 2013年12月21日（年4回発行）
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学 コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター フォーランド・ミュージアム部門『フォーランド・ノート』編集部



野生を育む
GrowWild
都留文科大学
フィールド・ミュージアム
Decent Wildlife and Our Community

